八宝飯

芥川龍之介

青空文庫

石敢当

今東光君は好学の美少年、「文芸春秋」二月号に桂川中良の桂林漫録を引き、大いに古琉球風物詩集の著者、佐藤惣之助君の無学を嗤ふ。瀟麗の文章風貌に遜らず、風前の玉樹も若かざるものあり。唯疑ふ、今君亦石敢当の起源を知るや否や。今君は桂川中良と共に姓源珠※の説を信ずるものなり。されど石敢当に関する説は姓源珠璣に出づるのみにあらず、顔師古が急就章（史游）の註にも、「衛有石※鄭有石奚斉有石之紛如其後亦以命族石敢当」とあり。その何れを正しとすべき乎、何人も疑ひなき能はざるべし。徐氏筆精に云ふ「二説大不相侔亦日用不察者也」と。然らばその起源を知らざるもの、豈佐藤惣之助君のみならんや。桂川中良も亦知らざるなり。今東光も亦知らざるなり。知らざるを以て知らざるを嗤ふ、山客亦何ぞ嗤はざるを得んや。按ずるに鍾馗大臣の如き、明皇夢中に見る所と做すは素より稗官の妄誕のみ。石敢当も亦実在の人物ならず、無何有郷裡の英雄なるべし。もし又更に大方の士人、石敢当の出処を知らんと欲せば、秋風禾黍を動かすの辺、孤影蕭然たる案山子に問へ。

猥談

聞説す、我鬼先生、佐佐木味津三君の文を称し、猥談と題するを勧めたりと。何ぞその無礼なるや。佐佐木君は温厚の君子、幸ひに先生の言を容れ、君が日星河岳の文字に自ら題して猥談と云ふ。君もし血気の壮士なりとせんか、当に匕首を懐にして、先生を刺さんと誓ひしなるべし。その文を猥談と称するもの明朝に枝山祝允明あり。允明、字は希哲、少きより文辞を攻め、奇気甚縦横なり。一たび筆を揮ふ時は千言立ちどころに就ると云ふ。又書名あり。筆法遒勁、風韻蕭散と称せらる。その内外の二祖、咸な当時の魁儒たるに因り、希哲の文、典訓を貫綜し、古今を茹涵す。大名ある所以なり。然りと雖も佐佐木君は東坡再び出世底の才人、枝山等の遠く及ぶ所にあらず。この人の文を猥談と呼ぶは明珠を魚目と呼ぶに似たり。山客、偶「文芸春秋」二月号を読み、我鬼先生の愚を嗤ふと共に佐佐木君の屈を歎かんと欲す。佐佐木君、請ふ、安心せよ。君を知るものに山客あり矣。

赤大根

江口君はプロレタリアの文豪なり。「文芸春秋」二月号に「切り捨御免」の一文を寄す。論旨は昆吾と鋭を争ひ、文辞は卞王と光を競ふ。真に当代の盛観なり。江口君論ずらく、「星霜を閲すること僅に一歳、プロレタリアの論客は容易に論壇を占領せり」と。何ぞその壮烈なる。江口君又論ずらく、「創作壇の一の木戸、二の木戸、本丸も何時かは落城の憂目を見ん」と。

何ぞその悠悠たる。江口君三たび論ずらく、「プロレタリア文学勃興と共に、俄かに色を染め加へし赤大根の輩出山の如し」と。何ぞその痛快なる。唯山客の頑愚なる、もしプロレタリアに急変したる小説家、批評家、戯曲家を呼ぶに赤大根を以てせんか、その論壇を占領し、又かの創作壇の一の木戸、二の木戸、乃至本丸さへ占領せんとする諸先生も赤大根にあらざるや否や、多少の疑問なき能はず。且山客の所見によれば、赤大根の繁殖したるはプロレタリア文芸の勃興以前、隣邦露西亜の革命に端を発するものの如し。もし然りとせば江口君も、古色愛すべき赤大根のみ。もし又君の為に然らずとせんか、かの近来の赤大根は君の小説に感奮し、君の評論に蹶起したる新鋭気鋭の青年にあらずや。君自身これが染上げを扶け、君自身これを赤大根と罵る、無情なるも亦甚しいかな。君聴け、啾啾赤大根の哭、文壇の夜気を動かさんとするを。然れども古人言へることあり。「英雄豈児女の情なからんや」と。山客亦厳に江口君が有情の人たるを信ぜんと欲す。もし有情の人と做さんか、君と雖も遂に赤大根のみ。君と雖も遂に赤大根のみ。

×

瑯※山客

（大正十二年三月）

田中純君は「文芸春秋」のゴシツプの卑俗に陥るを論難し、「古今の文人、誰か陽物の大小を云々せんや」と言へり。我等も亦田中君の義憤に声援するを辞するものにあらず。然れども卑俗なるゴシツプを喜べるは古人も亦今人に劣らざりしが如し。谷三山、森田節斎両家の筆談を録せる「二家筆談」と言ふ書ある由、（三山は聾なりし故なり。）我等は未だその書を見ねど、市島春城氏の「随筆頼山陽」に引けるを読めば、古人も亦田中君の信ずる如く陽物の大小に冷淡ならず。否、寧ろ今人よりも溌溂たる興味を有したるが如し。

「山陽しばしば画師竹洞の大陽物をなぶる。竹洞大いに怒り、自ら陽物を書き、『山陽先生、余の陽物を以て大なりと為す。拙者の陰茎、僅に此の如し』とかきて山陽に贈る。画工小田百合座に在り。曰く、『是は縮図であらう、原本必ず大なり焉。』一座大笑す。（是より文人、竹洞を名づけて縮図先生と号す。）」（原文に交へたる漢文は仮名まじりに書き改めたり。）

我等は今人は買冠らねど、古人を買ひ冠ることは稀なりと為さず。又同じ今人にしても、海の彼岸にゐる文人を買ひ冠ることは屡なり。然れども彼等も実際は我等と大差なき人間なるべし。或は我等の几側に侍せしめ、講釈を聞かせてやるに足るものも存外少からざらん乎。と言へば大言壮語するに似たれど、兎に角彼等を冷眼に見るは衛生上にも幾分か必要なるべし。

×

今人を罵るの危険なることは趙甌北の「簷曝雑記」にその好例ありと言ふべし。南昌の人に李太虚と言ふものあり。明の崇禎中に列卿と為る。国変に死せず。李自成に降り、清朝定鼎の後、脱し帰る。挙人徐巨源と言ふものあり。嘗之を非笑す。一日太虚の病を訪ふ。太虚自ら言ふ、「病んで将に起たざらんとす」と。巨源曰、「公の寿正に長し。必ず死せじ」と。之を詰れば則ち曰、「甲申乙酉に（明の亡びたる〔二字欠〕の末年なり。）死せず。則ち更に死期無し」と。太虚怒る。これは怒るのも尤もなり。更に又巨源、一劇を撰す。この劇は太虚及び※芝麓賊に降り、後に清朝の兵入るを聞くや、急に逃れて杭州に至り、追兵の至るに驚いて、岳飛墓前、鉄鋳の秦檜夫人の跨下に匿る、偶この鉄像の月事に値ひ、兵過ぎて跨下を這ひ出せば、両人の頭皆血に汚れたるを描けるものなり。太虚この劇の流行を聞き、丁度南昌に来れる龔芝麓と共に、密かに歌伶を其の家に召し、夜半之を演ずるを観る。演じて夫人の跨下を出づるに至るや、両人覚えず大哭して曰、「名節地を掃ふこと此に至る。夫れ復何をか言はん。然れども孺子の為に辱めらるること此に至る。必ず殺して以て忿念を洩らさん」と。乃ち人をして才人巨源を何処かの逆旅に刺殺せしめたりと言ふ。按ずるに自殺に怯なるものは、他殺にも怯なりと言ふべからず。巨源のこの理を弁へず、妄りに今人を罵つて畢に刀下の怨鬼となる。常談も大概にするものなりと知るべし。

（大正十二年）

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行
　1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
2007年6月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八宝飯

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/